

如月 (きさらぎ)

降る雪や 明治は遠く なりにけり (中村草田男)

雪の日に母校の小学校を訪ねた草田男が「あんなに広かったはずの校庭が雪に埋もれ、小さく見える。ここで遊んだのは明治の終わりだったなあ」と、速い時の流れを詠んだ句のようです。

遠い昔を懐かしむ、草田男が晩年の句と思っていました。が、大学時代の句であるようです。

雪を題材に詠んだ句に、

いくたびも 雪の深さを 尋ねけり (正岡子規) もあります。

これは子規が病気に伏せていた時のものですが、雪を楽しい子ども心を感じられ、病の暗さを感じさせない句です。

しんしんと 雪降る木曾に あらげり (中村苑子)

は、雪国で暮らす日々の生活の風情を詠んでいます。雪

国の生活に安心感すら抱かせような句です。いずれの句も、雪が削り出す生活を巧みに表現してくれています。



梅一輪 一輪ほどの あた たかさ (服部風雪)

梅の花の頃になると、わが家の近くにあった梅の古木が、ふっとよみがえってきます。

きっと「これは梅の花。夏になると青い実がなって、梅干しを作るんだよ」と、幼子の私を背負いながら、母は語りかけていたのかも知れません。

ふと野山に目を移すと、指宿の梅も寒がゆるむ合間に一輪また一輪と、紅白の花びらを少しずつ増やしています。

三寒四温を繰り返しながら、確実に季節は春へと向かっています。

この頃になると山口百恵さんが歌って大ヒットした「いい日旅立ち」という歌を思い出します。

この歌は、大事な人を失った悲しみを歌い上げたものですが、悲しみを乗り越えて立ちあがる人の姿と寒に耐えて咲く梅の花が重なり、新たな希望が湧いてくるような気がします。

立春。すぐそこに春の足音が近づいています。

指宿市長 豊留 悦男



▲新春サッカー大会にて